慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	F.リストの"Ave Maris Stella" : もうひとつの声楽1声部のための稿
Sub Title	Another version of F. Liszt's "Ave Maris Stella" : for one voice and keyboard
Author	福田, 弥(Fukuda, Wataru)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1999
Jtitle	哲學 No.104 (1999. 12) ,p.45- 64
JaLC DOI	
Abstract	At present any catalogues of Franz Liszt's compositions refer that the only one version of his "Ave Maris Stella" for one voice and keyboard (harmonium) was composed in 1868 and was published in 1868 by Repos and in 1872 by Kahnt. The present known version was published both in 1936 and 1987. Both editions was edited on the basis of an autograph in The Goetheund Schiller-Archiv with shelf mark "GSA 60/C19". Lately the author found the existence of another version of Liszt's "Ave Maris Stella" for one voice and keyboard (piano or harmonium), whose copy manuscript is today preserved in The National Library in Paris with "Ms. 177", and whose printed copies are preserved both in the same library with "D. 7075(7)" and The Liszt Ferenc Memorial Museum in Budapest with "LH 3576/ 1-6". This version is clearly different from the one published both in 1936 and 1987. As a result in "Ave Maris Stella" for one voice and keyboard, now there are two versions. The first version is "Ms. 177", "D. 7075(7)" and "LH 3576". The second is "GSA 60/C19" and the one published both in 1936 and 1987. The former was composed in 1868 and published in 1868 by Repos and surely in 1871 by Kahnt, the latter was written probably before 1882.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000104-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

F. リストの "Ave Maris Stella"

—もうひとつの声楽1声部のための稿—[1]

福　田　　弥*

Another version of F. Liszt's "Ave Maris Stella" for one voice and keyboard

Wataru Fukuda

At present any catalogues of Franz Liszt's compositions refer that the *only one version* of his "Ave Maris Stella" for one voice and keyboard (harmonium) was composed in 1868 and was published in 1868 by Repos and in 1872 by Kahnt. The present known version was published both in 1936 and 1987. Both editions was edited on the basis of an *autograph* in The Goethe- und Schiller-Archiv with shelf mark "GSA 60/C19".

Lately the author found the existence of *another* version of Liszt's "Ave Maris Stella" for one voice and keyboard (piano or harmonium), whose *copy manuscript* is today preserved in The National Library in Paris with "Ms. 177", and whose *printed copies* are preserved both in the same library with "D. 7075(7)" and The Liszt Ferenc Memorial Museum in Budapest with "LH 3576/ 1–6". This version is *clearly different* from the one published both in 1936 and 1987.

As a result in "Ave Maris Stella" for one voice and keyboard, now there are two versions. The first version is "Ms. 177", "D. 7075(7)" and "LH 3576". The second is "GSA 60/C19" and the one published both in 1936 and 1987. The former was composed in 1868 and published in 1868 by Repos and surely in 1871 by Kahnt, the latter was written probably before 1882.

* 東横学園女子短期大学非常勤講師

F. リストの “Ave Maris Stella”

フランツ・リスト Franz Liszt (1811–1886) は，その晩年，カトリック教会の聖母の祝日の「晩の祈り」で歌われる賛歌 “Ave Maris Stella” のテクストに作曲している．現在，以下の 5 つの稿が知られている．

A　混声合唱とオルガンのための稿 (R. 499a, S. 34–1)[2)]

ト長調，4 分 4 拍子

成立：1865–66 年（？）

初版：1870 年カーント社[3] [プレート番号 “1302”]

後の生前の出版：同社から 1871 年に「9 つの教会合唱曲集」，更に 1882 年に「12 の教会合唱曲集」の一曲として出版

B　男声合唱とオルガンのための稿 (R. 499b, S. 34–2)

変ロ長調，4 分 4 拍子

成立：1868 年 6 月 30 日

初版：1868 年ルポ社[4)]

後の生前の出版：カーント社から 1871 年に「9 つの教会合唱曲集」，更に 1882 年に「12 の教会合唱曲集」の一曲として出版

C　声楽 1 声部とハルモニウムのための稿 (R. 641, S. 680)

ト長調，4 分 4 拍子

成立：1868 年 6 月 30 日

初版：1868 年ルポ社 [プレート番号 “E. REPOS. 378”]

後の生前の出版：1872 年カーント社 [プレート番号 “1459”]

D　鍵盤楽器独奏のための稿

/1　ピアノまたはハルモニウム独奏ための稿 (R. 195, S. 506)

ト長調，4 分 4 拍子

成立：1868 年以後

初版：1871 年カーント社 [プレート番号 “1388”]

/2　オルガンまたはハルモニウムの独奏のための稿 (R. 394–2, S. 669–2)

ト長調，4 分 6 拍子

成立：1877年[5]

初版：1880年カーント社［プレート番号 pp. 9–11; “2297”, pp. 12–13; “2697”],「2つの教会賛歌」の第二曲として出版

これらの5つの稿は，いずれも主旋律はほぼ共通している．したがって各曲は，別の作品というよりもトランスクリプションというべきものである[6]．この他に，ハープのための稿[E]の存在が指摘されている[7]．又，リスト以外の手による編曲も，3つの稿がラーベ作品目録には記載されている[8]．ひとつは，ヴァイオリンとピアノのため[F]，もうひとつは，オーケストラのための稿[G]である．これらは共に，アルベルト・ハーン Albert Hahn (1828–1880)[9] による編曲である．残るひとつは，ベルンハルト・ズルツェ Bernhard Sulze (1829–1889)[10] によって編曲された，アルトとオルガンのための稿（女声合唱アド・リビトゥム）[H]である[11]．この曲は，曲自体は演奏時間6分前後の小品であるが，上記のように，リストの宗教音楽作品としては異例ともいえるほど，多くの稿が存在している．このことは，リスト自身がこの曲に固執し，また当時よく知られていた曲であることを示唆していよう．その意味で，彼の晩年を代表する作品のひとつであると考えられる．

本論文の対象は，声楽1声部と鍵盤楽器（ハルモニウム）のための稿[C]である[12]．上掲のように，ズルツェによる編曲稿を除くと，現在知られている単声稿はひとつである．それは，旧全集[13]とマルティン・ハーゼルベック Martin Haselbök によって出版されている[14]．両者とも，伴奏声部にはハルモニウムと指定があるが，声楽声部には指定がない．また共に，ヴァイマルにあるゲーテ・ウント・シラー・アルヒーフ所蔵の自筆譜，“GSA 60/C19”[15] をもとに校訂されたものである[16]．この自筆譜の冒頭には，リストではない人物の手によって“Franz [?] Liszt Weimar/

1882”[17]と，黒インクで書き込まれている．

ラーベの作品目録では，この稿は「1868年作曲，1868年ルポ社より出版．1872年カーント社より出版」と言及されており，サールの作品目録には「1868年作曲，1868年パリで出版」と書かれている．この記述の根拠は，リストがローマから1868年7月1日付けで，先の出版者ルポに宛てた書簡である[18]．ここで彼は，“Ave Maris Stella”について「私の最初の手稿譜は紛失している．私は昨日丸々一日かけて，この素朴な曲を再び書いた．あなたは，次の機会にこのふたつの稿を受け取るでしょう．ひとつは，メゾソプラノとピアノまたはハルモニウムのためのもので，もうひとつはオルガン伴奏による男声4声のためのものです．」と述べている．又，同書簡では，ドイツと違って，ローマには理解のあるコピストが少なく，雇っているただ一人が当時病気であるとも述べている．この書簡から，男声4声稿[B]と単声稿[C]は，共に1868年6月30日に作曲されたことは明らかである．又，1868年に作成された単声稿は，メゾ・ソプラノとピアノまたはハルモニウムのための稿であることが判る．なお，ここで言及されている「最初の手稿譜」とは，混声合唱稿[A]のものと考えられている[19]．更に同じ書簡でリストは，この曲のゲラ刷りを送るように要求している．そして同年8月26日付けのルポに当てた書簡[20]では，「昨日私のもとに届いた“Ave Maris Stella”のゲラ刷りを貴方に同封します．この最初のゲラ刷りにあるたくさんの間違いを，原板では修正しておいていただけるでしょうか．出版における正確さは，［出版社の］仕事がら義務の筈ですが，余りにしばしばなおざりにされるのです．」と書き送っている（［ ］内は筆者の補足）．ここから，8月25日に着いた多くの間違いを含むゲラ刷りの修正を彼は1日で行い，翌26日には送り返していることが判る．初版の出版年の特定については後述するが，このやり取りはこの初版が1868年に出版されたことを裏付ける根拠のひとつになろう．

いずれにしても，作曲年に関してふたつの作品目録と自筆譜の記述には，明らかに矛盾がある．今日まで，「1882年(？)」という第三者による日付をもつ自筆譜“GSA 60/C19”が，1868年に作成されたと無批判のまま受け入れられてきたのである．この矛盾は，著者の調査によって解明された．つまり，この単声稿にはもうひとつの別の稿が存在し，ふたつの稿の作曲年，出版年を突き詰めていくことで，その矛盾は解明されたのである[21]．本論文は，その解明を目的とする．なお，今回確認された稿が，いままで知られている稿と全く異なることは，両者の比較によって明らかにされる．

1　もうひとつの単声稿

まず，新たに所在が確認されたもうひとつの単声稿（譜例1）と今まで知られていた稿（譜例2）との関係について検討する．譜例1はブダペシュトのリスト記念博物館所蔵の“LH 3576/1”からのファクシミリである．譜例2はHEの冒頭である．

まず，譜例1と2を見れば明らかなように，譜例1のピアノまたはハルモニウムのための伴奏声部は分散和音が主体である．曲全体を通じても，分散和音や和音連打が多く，譜例2のハルモニウムのための伴奏声部に比べて，音価の短い動きが中心である．これは，ピアノを想定して書かれたと思わせるテクスチュアである．一方，譜例2の伴奏声部は，よりハルモニウムにふさわしいテクスチュアといえる．

表1は両稿の音楽的な対応関係を示している．数字は，各稿の小節を表す．

表1から判るように，両稿の間には，約20小節の相違がある．そして，伴奏声部のテクスチュアは全く異なっていることを考えると，新たに所在が確認された稿（譜例1）は，今日まで知られていた稿（譜例2）とは明らかに異なるものであると断定される．つまり，単声稿はふたつあっ

譜例1

4

AVE MARIS STELLA.

Andante sostenuto. Fr. Liszt.

Canto.

Piano ou Harmonium.

A - ve maris stel - la,

pp una corda

A - ve maris stel - la De - i Ma - ter al - ma,

sempre legato

At - que sempre vir - go, Fe - lix coe - li por - ta, Su - mens il - lud

A - ve, Ga - brie - lis o - re, Fun - da nos in pa - ce,

Leipzig, bei C. F. Kahnt. 1459 Stich und Druck von W. Reinicke in Leipzig

"LH 3576/ 1" (The Liszt Ferenc Memorial Museum in Budapest) から第４頁
エックハルト館長の許可のもとに掲載

譜例2

AVE MARIS STELLA

Andante sostenuto, più tosto lento

Harmonium

A - ve ma-ris stel - lat A - ve ma-ris stel - la ma-ter De - i

al - ma, at - que sem-per vir - go, fe - lix coe - li por - ta. Su-mens il - lud

A - ve Ga-bri - e - lis_ o - re, fun-da nos in pa - ce, mu-tans E - vae

no - - - men. Sol - ve vin-cla re - is, pro-fer lu - men cae - cis:

HE, vol. IX, 第23頁

F. リストの “Ave Maris Stella”

表 1

LH*	**1–2,	3–6,	7–8,	9–25,	26–27,	28–29,	30,	31–33,	34,	35,	x,	36–39					
	∨	| |	∨	| |	∨	| |	|	| |	|	|	|	|				
HE	x,	1–4,	x,	5–21,	x,	22–23,	24,	25–27,	28,	29,	30,	31–34					
//																	
LH	x,	40–43,	x,	44–51,	x,	52–53,	x,,	54–55,	56–72,	73–74,	75–76,	77,					
	|	| |	|	| |	|	| |	|	∨	| |	∨	| |	|				
HE	35,	36–39,	40,	41–48,	49,	50–51,	52,,	x,	53–69,	x,	70–71,	72,					
//																	
LH	78–87,	88–94|															
	| |	| |															
HE	73–82,	83–87|															

*: “LH3576/ 1”
**: Auftakt
x: 対応する小節がないことを示す

たのである．以下便宜上，前者を C/1 稿，後者を C/2 稿とする．

2. 資料

ここで，それらのふたつの稿［C/1 と C/2］について，現在知られている全ての手稿譜を提示し，それらの手稿譜と印刷譜の関係を整理する．

2–1 手稿譜

現在一般に知られている単声稿の手稿譜は，前述の自筆譜 “GSA 60/ C 19” だけである．この自筆譜の筆致は極めて粗雑で，走り書きのように見える．修正の跡もほとんど認められず，39 小節目を書き落としてしまっていることなどを考えると[22]，短時間に一気に書き上げられたと思われる．そのことを考えると，この楽譜は，ある特定の機会に特定の人のために書き留められたものかもしれない．おそらく受け取った人物が，入手した日付として “1882”(?) 年と書いたのであろう．従って，この “GSA 60/ C19” の作成はおそらく 1882 年以前である[23]．

伴奏声部は “Harmonium” とリスト自身によって指示がなされている．その上に書かれている 1 段の声部には指定はないが，“Ave Maris Stella”

というテクストが書かれているので声楽声部であると判る．しかしながら独唱か否かは断定できない．その声楽声部は，冒頭の6小節のみが記譜されている．したがって，この自筆譜が何らかの他の手稿譜或いは出版譜に依拠していることは明らかである．しかし，それを特定する根拠はあげられない．にもかかわらず，旧全集とHEでは，詳細な検討の無いまま，混声合唱稿[A]の最上声部（ソプラノ第1声部）を採用している．ただし，混声合唱稿とは，調がト長調であること，冒頭が女声声部のみで始まることなどの点で一致している[24]．

さて，筆者のフランス国立図書館の調査によって，もうひとつの手稿譜の存在が判明した．それは，同図書館所蔵のリストの手の入った筆写譜“Ms. 177”[25]である．タイトル・ページにはリスト自身によって「ピアノまたはハウモニウム伴奏による，メゾソプラノ1声のためのAve Maris Stella」と書かれている．ただし，この筆写譜の声部指定には，ただ“Canto”とある．更にこの筆写譜には，数小節ごとに数字が鉛筆で書き込まれている．これは，リストの筆写譜に見られる一般的な習慣から考えて，おそらく出版者によるものである．そしてこの数字は，同じくフランス国立図書館が所蔵する初版譜“D. 7075(7)”に見られる印刷された譜表の段数と一致しているのである[26]．例えば，“Ms. 177”の伴奏声部の6小節目や10小節目の終わりには，それぞれ“3”と“6”という数字が書かれている．この稿の場合，声楽声部1段と伴奏声部2段の3段譜表で書かれているので，印刷に際し，6小節目までが楽譜の第1頁の上から3段を要し，10小節までは6段要するという意味である．つまり，初版楽譜では7小節目と11小節目からそれぞれ次の段に印刷されることを意味している．18小節目には“12”，22小節目には再び“3”と書かれている．これは，初版楽譜の第1頁は全部で12段であり，18小節目までが印刷され，次の頁の上から3段には続く22小節目までが印刷されるという意味であ

る．この1頁に何段の譜表を印刷するかという指示が，初版譜に印刷された譜表の段数と一致しているのである．したがってこの筆写譜は，ゲラ刷りのために出版社に渡された手稿譜（Stichvorlage）であると断定される[27]．

1868年の前述の書簡で「メゾソプラノとピアノまたはハルモニウムのための」稿を作曲したとリスト自身が述べていること，”GSA 60/ C19”は冒頭の書き込みから1882年以前に作成されたと判断できること，これらを鑑みると，この1868年7月1日の書簡で言及されている楽譜は“Ms. 177”であると考えられる．本論文では上述の自筆譜と書簡の日付から，以下“Ms. 177”の稿を初稿，“GSA 60/C19”の稿を第二稿と記す．つまりC/1稿は初稿，C/2稿は第二稿に対応する．

2–2　印刷譜

“GSA 60/ C19”に基づく第二稿［C/2］の印刷譜は，前述の通り一般に知られている旧全集とHEの版である．ここでその三つの楽譜を比べてみる．主要な異同以外は，表2に記すだけにとどめる．いずれの楽譜も，曲の構成，小節数は一致している．

24小節と55小節のハルモニウムの右手声部は，旧全集，HE共にそれぞれ複付点二音符と八分音符，付点四分音符と八分音符となっているが，“GSA 60/C19”では付点二分音符と四分音符，四分音符ふたつとなっている．旧全集の校訂報告によれば，これらの個所は，並行個所をもとに変更したとされている[28]．言うまでもないことだが，ロマン派以降の音楽では，並行する個所をもとに変更することは，真正さを欠く校訂と言わざるをえない．作曲者が，敢えて異なる音楽を書いた可能性を払拭できないからだ．

“GSA 60/C19”は39小節目が欠落しており，後からそこに1小節が存

在することを書き示している．一方，旧全集とHEの39小節目には，タイによって前の小節からつながれた四分音符の和音と休符三拍分がある．又，旧全集は，最後の2小節はタイで結ばれているが，HEに見られるように，“GSA 60/C19”にはタイはない．

表2からも判るように，HEの方がより“GSA 60/C19”に近い校訂となっていると言える．しかし旧全集にしろHEにしろ最後のタイを除けば，“GSA 60/C19”との間に音高と音価，音楽的構成に相違はなく，全て同じ稿[C/2]であるといえる．

表2

小節	“GSA 60/C19”	旧全集	HE
冒頭の速度表示*	なし	あり	あり
冒頭の指定	なし	“Singstimme.”	なし
26	“f”	“mf”	“mf”
13–21, 61–69	スラーなし	スラー	スラー
49–52, 78–85/87**			
39	欠落	四分音符と休符	四分音符と休符
86–87	タイなし	タイ	タイなし

* “Andante sostenuto, piú tosto lento”
旧全集，HE共に声楽声部を混声合唱稿[A]から校訂したため，この速度記号も混声合唱稿にならって付けたものと思われる．

** 旧全集は87小節まで，HEは85小節まで左手声部にスラーが付けられている．

一方，“Ms. 177”に基づく初稿[C/1]の印刷譜は，上述のようにパリのフランス国立図書館に，“D. 7075(7)”として保存されている．出版社はパリのルポ社で，プレート番号は“E. REPOS. 378”である．“D. 7075(7)”の第“1”頁の上には，第三者の手によって“Dépôt 1868_N°＝4981”と書かれている．これはフランス国立図書館への納本が1868年になされたことを示しており，ここからこの初版の年は確実に1868年であると断定される[29]．第“1”頁には以下の上書きがある：

“AVE MARIS STELLA / POUR UNE VOIX MEZZO-SOPRANO /

AVEC ACCOMPANEMENT DE PIANO / ou / HARMONIUM. / PAR / FRANÇOIS LISZT.".

ライプツィヒのカーント社からも初稿は出版されている．この印刷譜はブダペシュトのリスト記念博物館に，"LH 3576/ 1–6" として 6 部保管されている．プレート番号は "1459" である．ドイッチュ Otto Erich Deutsch によれば，カーント社のプレート番号 "1360" は 1870 年，"1526" は 1871 年の出版である[30]．又，新リスト全集によれば "Ave Maris Stella" のピアノまたはハルモニウム独奏ための稿 [D/1] の初版は，カーント社より 1871 年に出版されているという[31]．このプレート番号は "1388" である．したがって，この単声稿のカーント社による出版はおそらく 1871 年である．ラーベ作品目録には，「1872 年にカーント社より出版」という記載がある．彼がここで 1872 年としている根拠は不明であるが，この記述は "LH 3576/ 1–6" として保管されているこのカーント版のことを示していると考えられる．

このカーント版の上書きは以下の通りである：

"AVE MARIS STELLA. / HYMNE / für eine Singstimme / mit Begleitung des Pianoforte / [oder Harmonium] / von FRANZ LISZT / … / LEIPZIG, BEI C. F. KAHNT".

ここで，"Ms. 177" とこのルポ版およびカーント版について比較検討する．

リストは 21 小節と 68 小節に自ら，「註，製版の際には，シンコペーションを正確に分けるように注意すること ("NB- / faire attention / á la division / exacte des / syncopes dans / la gravure")」と書き込んでいる．"Ms. 177" の 59–60 小節の「我が罪 ("Nos culpis")」の声楽声部では，もともと書かれていた音符を削って消し，その上に新たな音符をリス

トは書いている．更に彼は，26–27小節には“somorzando”，77小節には“crescendo”，81小節には“ff”の指示を加えている．これらの註や修正は，ふたつの印刷譜ともに反映されている．しかし，17小節に書き込まれた“sempre pp”はどちらにも印刷されていない．

細かい異同については，表3に記す．ふたつの楽譜とも，曲の構成，小節数は一致している．

表3から判るように，これらの3つの楽譜の発想記号にはかなりの異同がある．また，38小節の異同は，前後の小節が変ロ音なのでミス・プリントと考えられるが，実際には音高が半音違ってしまっている．この異

表3

小節	“Ms. 177”	“D. 7075(7)”	“LH 3576/ 1–6”
・声楽声部			
31	アクセント	なし	なし
32–33	なし	クレッシェンド	クレッシェンド
78	なし	なし	アクセント
82	なし	アクセント	アクセント
9–12, 14–20, 24–25, 36–37, 56–59, 62–67, 71–72	なし	なし	スラー
・伴奏声部			
7, 8	なし	なし	スラー
9	ペダル解除記号	ペダル解除記号	なし
17	“sempre pp”	なし	なし
30–31	スラー	左手声部スラーなし	左手声部スラーなし
31, 39, 43, 73	アルペッジョ記号 両手つなげて	左右分けて	左右分けて
38	ロ音にフラット	なし	なし
39	なし	ディミヌエンド	ディミヌエンド
39–40	なし	タイ	タイ
54–55	なし	なし	タイ
79	“F”（フォルテ）	なし	なし
91	なし	なし	アルペッジョ

同と二ヶ所のタイを除けば，音高と音価，音楽的構成には相違は認められない[32]．したがってこの3つの楽譜は，いずれも同じC/1稿であると判断できる．

ルポ版"D. 7075(7)"とそのStichvorlageである"Ms. 177"との間の異同は，印刷ミスによるのか，あるいはゲラ刷り段階でのリストの変更によるのかは，現時点では判断できない．興味深いことは，ルポ版に固有の異同がないことである．つまり，"Ms. 177"とカーント版のみに共通し，ルポ版のみに認められる異同はないのである．その一方で，カーント版のみに認められる異同は，スラーをはじめとしてかなり多い．カーント社の出版のためにリストが異なるStichvorlageを用意しなかったとも，カーント社のゲラ刷り段階で修正を加えなかったとも断言できないので，この結果をもって直ちに，カーント版は信憑性が低いとは決して言えない．むしろ，リストの生前にほぼ同時期に出版された印刷譜には，このような異同が認められることの方が一般的であり，この曲の場合もそうした問題を如実に反映していると考えるべきであろう．

結論

以上の検討によって，"Ave Maris Stella"の単声稿は，ふたつあることが明らかになった．初稿[C/1]の手稿譜は，リストの手の入った筆写譜"Ms. 177"である．初版は1868年にルポ社から出版された．初版譜の一例は，現在パリの国立博物館に所蔵されている"D. 7075(7)"である．また，1871年にはカーント社からも出版されている．この印刷譜の一例は，ブダペシュトのリスト記念博物館に所蔵されている"LH 3576/ 1–6"である．この稿は，メゾ・ソプラノとハルモニウム又はピアノのための稿である．リストが1868年の書簡で言及している稿は，正にこの稿のことである．しかし以後，旧全集でも取り挙げられることなく，今日までこの稿は無視され続けてきた．第二稿[C/2]の手稿譜は，自筆譜"GSA 60/ C

19”である．印刷譜は，この自筆譜をもとに校訂された旧全集とHEである．この稿は一般的に知られてきたもので，おそらく1882年以前に作成された．伴奏はハルモニウムであることは判っているが，声楽声部は，男声か女声か，更に独唱か否かも不明である．

そして各稿とも，それぞれ手稿譜と印刷譜の間に音楽的な構成，音高，音価の相違は，ほとんど認められなかった．ここで両稿について整理しておく．本論文冒頭の「声楽1声部とハルモニウムのための稿」[C]の項目は，以下のように修正されることになる．

C　声楽1声部と鍵盤楽器のための稿

/1　メゾ・ソプラノとピアノまたはハルモニウムのための稿(R.-, S.-)［初稿］

ト長調，4分4拍子

成立：1868年6月30日

初版：1868年ルポ社［プレート番号“E. REPOS. 378”］

(フランス国立博物館，“D. 7075(7)”)

後の出版：1872年カーント社［プレート番号“1459”］

(リスト記念博物館，“LH 3576/ 1–6”)

自筆譜：所在不明

筆写譜：フランス国立博物館，“Ms. 177”

/2　声楽1声部とハルモニウムのための稿(R. 641, S. 680)［第二稿］

ト長調，4分4拍子

成立：1882年(?)以前

初版：1936年旧全集

後の出版：1987年HE

自筆譜：ゲーテ・ウント・シラー・アルヒーフ，“GSA 60/C19”

筆写譜：不明

ラーベの作品目録とサールの作品目録では，第二稿は1868年に作曲と出版がなされたと，誤って記載されている．1868年に作曲されたのは，実はパリに筆写譜が所蔵されている初稿だったのである．そして第二稿の初版は，旧全集だったということになる．おそらく旧全集の校訂，出版および上記ふたつの作品目録の作成の時点で，すでに初稿の存在は忘れられていたいたために，年代的な矛盾は深く考慮されなかったのであろう．しかしリストの生前に出版された稿は初稿のみであり，第二稿はリストに出版する意志があったとは断言できない稿なのである．したがって，初稿の存在が明らかになったことは少なからぬ成果であったといえる．

註

1) 筆者の1998年夏の調査を極めて快く受け入れていただいた，パリのフランス国立図書館音楽部門のカテリーヌ・マシップ Cathérine Massip 主任をはじめとする諸氏に，この場を借りて感謝の意を表させていただきたい．
2) R. 及び S. に続く数字は，それぞれ以下のリストの作品目録の番号である．
   R.: Raabe, Peter, *Liszts Schaffen*, Stuttgart 1931, 2. Aufl. Tutzing, Hans Schneider 1968, S. 241–364
   S.: Searle, Humphrey with Winklhofer, Sharon, Liszt, in; *The New Grove Early Romantic Masters 1*, New York, London, Macmillan 1985, pp. 235–378.
3) クリスティアン・フリードリッヒ・カーント Christian Friedrich Kahnt (1823–1897) が1851年にライプツィヒに創設した出版社．多くのサロン音楽のほか，リストやグスタフ・マーラー Gustav Mahler (1860–1911) の作品の出版で知られる．
4) パリの出版兼小売業者．主に1860年代末にリストのいくつかの宗教的作品を出版している．彼の "Requiem" (R. 488, S. 12) も，1869年に同社から出版されている．
5) 従来この稿の成立は1868年以後とされていたが，筆者の研究によれば，主に作曲が進められた年は1877年であることが明らかとなった．この問題に関しては次の拙論を参照されたい．
   Fukuda, Wataru, "Drei Zigeuner", Gebet" and "Ave maris stella" from

Liszt's Manuscripts in the Richard Wagner Museum at Bayreuth, in; *Journal of The American Liszt Society*, vol. 44, Fall 1998, pp. 24–34.

6) パラフレーズ，トランスクリプションという用語の概念規定ないし定義は難しい．本論では，演奏形態や編成の変更という意味で，トランスクリプションという用語を使用した．この問題については以下を参照されたい．

Huschke, Wolfram, Termini technici im Feld der Bearbeitungen bei Liszt, in; *Studia Musicologica* 34, 1992, SS. 267–274.

7) リストはD/2稿について，カーントに宛てた1877年10月12日付けの書簡で，「私の"Ave Maris Stella"のハルモニウムのためのトランスクリプション（ピアノでも，いやハープでさえも！）」と言及している．この書簡は以下の論文の中で出版されている．

Dette, Arthur, Unbekannte Briefe Franz Liszts, in; *Neue Musik-Zeitung* Nr. 46 (2 May 1925), S. 370–374

これを受けて，フリードリッヒ・シュナップ Friedrich Schnapp は，ハルモニウム稿からピアノで演奏することはできるが，ハープでは演奏不可能であるため，別にハープのための稿があったはずだと主張している．

Schnapp, Friedrich, Verschollene Kompositionen Franz Liszts, in; *Festschrift für Peter Raabe*, Peters 1942, S. 119–153, hier S. 147.

8) Raabe, ibid. S. 325–326.

9) ハーンは，音楽学者，指揮者である．

10) ズルツェは，ヴァイマルのオルガニストである．彼は，「詩編13」(R. 13, S. 489) をはじめとして，リストの幾つかの作品のオルガン編曲を手掛けている．

11) ズルツェによって編曲された稿の手稿譜は，現在ブダペシュトのリスト記念博物館に"Ms. mus. L.55"として所蔵されている．

"Ms. mus. L.55" (Budapest)
Manuscript: 6 folios with 10 staves
The musical lines: grey
Oblong format: 25, 6×33.2 cm
Notation: ff. 2^r-5^v, (f. 6^{r-v}: no music)
No pagination, No watermark
Title inscription on f. 1^r: "Ave Maris stella / Hymne / für eine Alt Stimme und Frauen Chor. von / Franz Liszt"
Title inscription on f.2^r: "Ave Maris stella / Fr. Liszt / Orgelbegleitung eingerichtet von B. Sulze"

Instrumental specification: "Singstimme / Alt / Manuale / Pedal"
レガーニの次の文献によれば，この編曲稿は 1879 年 6 月半ばに演奏された記録がある．従って，それまでに編曲がなされていたことは間違いない．
Legány, Dezsö *Liszt and His Country 1874–1886*, trans. S.-C.-Rónay, Elizabeth and Merrick, Paul, Budapest, Occidental Press 1992, p. 119.

12) 筆者の知るかぎり，声楽 1 声部のための稿の最も早い演奏記録は，1874 年 3 月 19 日のブダペシュトのマーチャーシュ教会での演奏である．なお本論では，余り一般的な言い方ではないが，この声楽 1 声部と鍵盤楽器のための稿を単に単声稿と記す．
Liszt, Franz, *Unbekannte Press und Briefe aus Wien 1822–1886*, hrsg. Legany, Dezsö Wien, Köln, Graz, Böhlau 1984, S. 192.

13) Liszt, Franz, *Franz Liszts Musikalische Werke*, hrsg. Franz Liszt- Stiftung, Breitkopf & Härtel, Leipzig 1936, V-6, S. 33–35. [以下旧全集と記す]

14) Liszt, Franz, *Sämtliche Orgelwerke*, hrsg. von Haselböck, Martin, Wien, Universal Edition 1986, Bd. IX, S. 23–25 [以下 HE と記す]

15) "GSA 60/ C19" (Weimar)
Autograph manuscript : 1 bifolio with 10 staves
The musical lines: blue, with rastral
Oblong format: 20.9×26.4 cm
Notation: ff. 1^r-2^r, (f. 2^v: no music)
Script: black ink, Addition : red crayon (mm. 39)
No pagination, No title, No watermark
Title inscription on f.1^r: "Franz [?] Liszt Weimar / 1882" (black ink) not by Liszt
Instrumental specification: "Harmonium" (black ink)

16) 旧全集 , Bd. V-6, S. VI-VII, 及び HE, Bd. IX, "Verzeichnis der Quellen"

17) ブダペシュトのリスト記念博物館のマーリア・エックハルト Mária Eckhardt 館長は，1999 年 1 月 8 日付けの筆者宛ての私信において，"1881" ないし "1887" とも読めると指摘している．

18) Franz Liszt, *Franz Liszt's Briefe*, hrsg. La Mara, Bd. 2, Leipzig, Breitkopf & Härtel 1893, S. 122–123, [以下 Br. と記す]

19) Raabe, ibid. S.325

20) Br. Bd. 2, S. 124

21) なお，筆者の調査および本稿の執筆と同時期に，フランス国立博物館が所蔵

するリストの手稿譜についての論文が発表された．この論文は所蔵手稿譜のカタログを含んでいる．

Saffle, Michael, Liszt Music Manuscripts in Paris: A Preliminary Survey, in; *Analecta Lisztiana I, Liszt and His World, Franz Liszt Studies Series No. 5*, ed. Saffle, Michael, Stuyvesant, New York, Pendragon Press 1998, pp. 101–135

ここでサッフルMichael Saffleは，同図書館が所蔵する単声稿の筆写譜("Ms. 177")は旧全集で出版された"Ave Maris Stella"とは異なっており，旧全集の校訂では無視されていると言及している．筆者の知るかぎり，この言及が，もうひとつの単声稿の存在をほのめかしている唯一のものである．

22) "GSA 60/ C19"の書き落とした個所に，リストは赤のクレヨンで×印をつけている．これが，この自筆譜に後からなされた唯一の書き込みである．

23) エックハルト館長は上述の私信において，この楽譜の作成は，リストの筆跡から考えて1870年代ではないかと述べている．

24) 伴奏声部の46–52小節，83–87小節も一致している．男声合唱稿[B]は，変ロ長調であるし，譜例1の稿[C/1]とは，表1に示したように小節数が一致しない．したがって，この旧全集とHEの校訂は，あながち恣意的であるとも言い難い．むしろ，"GSA 60/C19"を作成するにあたってリストが依拠した稿を，混声合唱稿［A］に求めたことは，自然であったとも考えられる．

25) "Ms. 177" (Paris)
Copy manuscript with Liszt's hand: 5 folios with 12 staves
The musical lines: dark brown, with rastral
Upright format: 24.8×18.6 cm
Notation: ff. 1^{v}-4^{v} (f. 5^{r-v}: no music)
Script: dark brown ink and lead pencil
No pagination, No watermark
Title inscription on f. 1^{r}: "Ave Maris Stella / pour une voix de / Mezzo-Soprano / avec accompagnement de / Piano (ou harmonium) / F. Liszt" (dark brown ink) by Liszt
Instrumental specification: "Canto"

26) 但し，1個所に食い違いが見られる．筆写譜では29小節目の右側に"6"と書かれているが，印刷譜では"2"頁の6段目は，28小節までで段落が変わっており，1小節の食い違いが認められる．

27) リストは自筆譜をコピストに写譜させた後，その筆写譜に修正を加え，場合

によっては再びそれを写譜させ，自ら再度修正して，出版社に渡すのが一般的な習慣であった．従ってリストの作品の筆写譜には，Stichvorlage であるものとまだ作曲過程の段階のものが往々にして存在する．前者の場合，この "Ms. 177" と同様に，出版者が鉛筆書きで，譜表の段構成と頁分けを示す数字を書きこんでいるのが普通である．その際，色つきのクレヨンないし鉛筆で，プレート番号も書き込む場合もあった．

28) 旧全集，Bd. V-6, S. VI

29) 繰り返しになるが，1868年7月1日と8月26日のルポ宛ての書簡におけるゲラ刷りについての言及も，初版が1868年に出版されたことを示唆していよう．

30) Deutsch, Otto Erich, *Musikverlages Nummern*, Berlin, Merseburger 1961, S. 16

31) Liszt, Franz, *New Liszt Edition*, vol. I-16, Budapest, Editio Musica Budapest 1982, p. XII

32) リスト記念博物館に所蔵されているこの6部の印刷譜のうち，"LH 3576/1" には，リストの手とは思われない書き込みが声楽声部にある．その書き込みでは，21–23小節目と68–70小節目を三連音符に変更し，続く24–25小節と71–72小節の音価と音高を変更している．この変更個所は，ズルツェによって編曲された稿 [H] の手稿譜 "Ms. mus. L. 55"（リスト記念博物館所蔵）と一致している．よってこの書き込みは，ズルツェによってなされた可能性がある．